

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	濱田 明日郎
論文題目	後期ベルクソン哲学における発生の問題		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、『創造的進化』(以下『進化』と略記)と『道徳と宗教の二源泉』(以下『二源泉』と略記)を中心とするアンリ・ベルクソンの後期の諸著作に対して、「発生」の問題という通底するテーマを見出し、後期ベルクソン哲学に一貫した理解を与えるものである。</p> <p>序章では研究の背景・研究主題・研究のアプローチが論じられる。ベルクソン哲学はこれまで、一方では「持続の哲学」といった統一的なスキームのもとでその哲学全体を単純化された仕方で理解され、他方では特定の著作やトピックにおいて限定的に評価される傾向が否めなかった。しかし本論はこうした研究状況を問題視し、時期区分が見出されることが稀であるベルクソン哲学の総体に、前期／後期という時期区分を導入し、このうち後期に固有のものとして「発生」の問題への取り組みを見出す。本論の見るところ、われわれがどこからきたのかを問う後期ベルクソン哲学の発生論的探求は、われわれにとって超越的であるはずの起源を、しかしわれわれに内在的に探求するという困難な課題への挑戦であった。そして、この課題に取り組むベルクソンの方法は彼が「心理学」と呼ぶものへの依拠であった。</p> <p>第一章は、『進化』がいかなる方法によって「人間種」の発生論を展開したのかを問題とする。生命進化を論じるこの著作でベルクソンは、進化の「最良の説明」として「心理的解釈」を掲げる。これが上で言及した「心理学」への依拠であるが、第一章は、「人間種」の「意識」という立脚点から回顧する仕方で生命進化を捉えるこの「心理的解釈」の妥当性を検討する。</p> <p>第二章は、このような「心理的解釈」がはじめに導入された人格論というトposについて、『進化』からの通時的な展開を再構成する。本章では、本邦では未だ論じられることの少ない『進化』と『二源泉』の中間期のテキストを取り扱うことで、後期ベルクソン哲学の発生論の展開を浮き彫りにする。『進化』においては、「意識」という原理による「人間種」の発生が示されたが、その後のギフォード講義「人格性の問題」においては「意志」という原理による「人格性」の発生という発生論が示されることになる。</p> <p>「人格性の問題」講義で提示される「意志」を原理とした「創造」は、『進化』のように「自己の連続的創造」を意味するのではなく、「他者の連続的創造」を意味するという点において、『二源泉』の「創造」概念を先取りしている。第三章ではこれを受けて、「創造」の原理としてもはや「意志」ではなく「情動」を掲げる『二源泉』において、どのような発生論が展開されているのかを、ベルクソンの宗教論の読解から明らかにする。本論はとりわけ、創造された「愛の対象」のあり方について詳述し、これを「愛」</p>			

すなわち「神」とは存在論的に区別される「個性」として規定する。ベルクソンの発生論は、「人格性」の発生論から「個性」の発生論へとさらに変貌を遂げるのである。

第四章は、第二章で提示した「意志」のベルクソン哲学と、第三章で提示した「情動」のベルクソン哲学という対照を念頭に置きつつ、ベルクソンの道徳論を読解する。ベルクソンの道徳論の基本的な概念装置として知られる「閉じた」／「開いた」の対概念については、前者から後者への移行がどのように捉えられるのかという重要問題がある。そこで「人類」や「開いた社会」へと向かう道徳的実践において、そのあまりに大きな課題に対して「意志」が挫かれてしまうという問題の解決は、本論文においては愛という「情動」に見出されることになる。

最後に第五章では、以上のようなベルクソンの発生論において、「人間」が占める位置とその可能性が論じられる。第四章で論じた「開いた魂」を起動する「跳躍」という契機は、あくまで神秘家によって担われるものである。とすると、「開いた社会」や「開いた道徳」が実現するためには、差し当たり神秘家ではないわれわれ「人間」は、結局のところ「神秘家」を待つほかないことになってしまう。本論はこのような問題含みの「人間」の位置を明らかにするため、ベルクソンにおける「歴史」という、古典的なトポスに立ち戻り、彼の言う「開いた社会」、そして「人類」は決して到達不可能な理念などではなく、「人間」が「意志」しさえすれば、すぐそこに実現されうるものだと論じる。

以上の通り本論は、「発生」の問題を原理的かつ経験的に論じてきた後期ベルクソン哲学を再構成することで、ときには不当な扱いを受けてきたベルクソンの議論の多くを読解可能なものとし、この哲学者が残した後期のテキストのポテンシャルを高く評価するものである。

(論文審査の結果の要旨)

ベルクソンは、「意識と生命」と題された講演において、哲学の課題を次のように規定している。「われわれはどこから来たのか。われわれは何者なのか。われわれはどこへ行くのか。死活の問題とはこれであり、体系に頼らず哲学をするとき、私たちはただちにここに向かうはずです。」言い換えれば、ベルクソンにとっての哲学の課題とは「人間の起源、本性、運命」の解明に集約される。このうち、人間の本性や運命についてベルクソンは、「創造」や「持続」というよく知られた概念によって回答を与えている。すなわち、創造が継続される現場であることこそが人間の本性であり、そしてこれからも創造を継続することが人間の運命だというわけである。これに対して、起源については事情が異なってくる。

本性や運命であれば、それはわれわれが現に経験しているはずの「持続」や「創造性」を直接観察することによって捉えることができる。しかし、われわれを与えた起源は、すでにわれわれの眼前にはない。この直接観察不可能なものが、どのようにしてわれわれ自身によって認識可能であるのか。本論によれば、こうした問題こそが、後期ベルクソン哲学が引き受けた問題にほかならない。

言い換えれば、後期ベルクソン哲学の探求の対象は、もはや内観心理学の対象となるようなわれわれの個人的経験ではない。われわれが何を、どのように経験しているかということだけが問題となるのでは、もはやない。後期ベルクソン哲学とは、その経験の場としてのわれわれが、そもそもどのように発生したのかを、進化論・社会論・道徳論・宗教論、そしてそれらを包み込む宇宙論というより大きなスケールで探求するものであるのだ。

研究史上、ベルクソン哲学はその全体を体系化する特定の一つの主題のもとで論じられることが多かった。たとえばベルクソン哲学の全時期を包含する「持続の哲学」といった統一的なスキームが、そうした主題の一つである。しかしながら、こういった支配的な主題のもとでは、本論が着目する「発生」の問題は等閑視されざるを得ない。このような研究状況を踏まえて著者は、ベルクソン哲学において従来見出されることが稀であった前期／後期という時期区分をあえて導入することによって、とりわけその後期哲学において顕在化する「発生」の問題という主題を取り出し、ベルクソン哲学の新たな側面に光を当てようとした。

ベルクソンにおけるわれわれの起源の探求は、われわれ自身の心理学的な体験や報告に基づいてわれわれの起源へと遡行すること、より具体的に言えばわれわれの起源を「想起」という方向性を持っている。この点において、ベルクソン流の起源の探求方針は、「心理学」の名のもとにプラトニックな「想起」を實踐するものと言い換えることができる。ベルクソンは、われわれの起源の探求に付随するメタ的な問題、すなわち、われわれがどのようにしてわれわれ自身の起源を探求することができるのかという問題を、「心理学」に依拠することでクリアしつつ、この課題に取り組んだのである。

しかしながら、このベルクソンにおける「心理学」への依拠は長らく論争の的ともなってきた。たとえばジョルジュ・ポリツェルは、『意識に直接与えられたものについての試論』以来のベルクソンの心理学への依拠は素朴なもので、私たちの生に迫るための方法的厳密さを欠いていると断じた。それによれば、ベルクソン哲学とは古式ゆかしき「心理学の哲学」という統一的な枠組みを少しも越え出ることがない哲学体系であり、「心理学」の「応用」が許されるのも、そうした体系においてのことではないという。本論の重要な意義のひとつは、こうした従来なされてきた批判に対して、ベルクソンに内在的な立場から応答を試みた点にある。著者は、後期の著作の中から、最も「心理学的生命論」的であり「心理学的宇宙論」的であるような諸テキストを拾い上げ、その哲学的考察を成立させているベルクソンの方法論を内在的に再構成したうえで、ベルクソンの言うところの「心理学」とは何か、そしてなぜベルクソンが「心理学」に依拠したのか、その必然性と妥当性を説得的に明らかにした。

論文全体の統一性という観点からすると、第四章や第五章など、後半に進むにつれて、発生論という当初の問題設定からやや離れていってしまう点に不満が残らないわけではないが、それらの章も含めて、各章は全体テーマから外れる部分にも注目すべき議論を含んでおり、この点も高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降